

令和2年度 奈良市発達支援ネットワーク会議の概要

開催日時	令和3年1月21日（木）午後2時から午後4時まで
開催場所	奈良市役所 中央棟地下1階会議室（旧武道場）
議 題	1 奈良市の発達支援の現状報告 2 今後の方向性について 3 討議
出席者	出席委員5人（欠席委員なし）・事務局10人
開催形態	公開（傍聴人 2人）
担当課	子ども未来部 子育て相談課

議事の内容

1. 奈良市の発達支援の現状（令和元年度実績報告）

（1）母子保健課の相談実績

1歳7か月児・3歳6か月児健康診査受診状況と発達相談実績
 発達支援親子教室の実績
 子ども発達センターへの紹介について

（2）子ども発達センターの相談実績

電話・来所相談実績
 園巡回・園訪問相談事業実績（教育との就学に向けた同行園巡回相談含む）
 園訪問相談から見えてきた課題について

（3）保育総務課の相談実績

特別支援教育コーディネーターリーダーの活動実績
 特別支援に関する研修実績

（4）教育支援・相談課の相談実績

年長児対象の就学に係る相談実績

（5）障がい福祉課の障害児通所支援事業の報告

児童発達支援事業所数、相談支援事業所利用者率について

（6）奈良市の発達支援の現状のまとめから見えてきたこと

- ・ 幼児健診からの発達支援の流れが確立してきている。
- ・ 地域園による「気づきの段階」からの療育相談への促しが増えている。
- ・ こども園等と連携し、保育環境の調整に取り組んでいる。
- ・ 療育の必要性が認められる幼児が、身近な場で療育を受けやすい環境が整ってきている。

2. 今後の取り組み

- （1）地域園での基礎的環境整備と合理的配慮の推進
- （2）身近な場で療育を受けやすい体制づくり
- （3）親子教室の体制づくり

3. 討議内容

奈良市の発達支援の充実～低年齢児の親子支援の強化について～

(1) 親子支援の事業を展開する上での着眼点

- ・保護者は心のケアを受けられないまま不安だけを抱えてくることが多い。
- ・健診で発達の遅れを指摘され、「でも少しの遅れ」や「心配はないとは思う」と言われても、「逆に心配なことがある」と捉える保護者もいる。
- ・奈良市では親子教室やサークルなど子育て支援は確保されているが、そこにハードルを感じる人には個々の支援ができる仕組みが必要。
- ・健診で言葉数の少なさや視線の合わなさを指摘され、毎日心にひびが入っていた。きしゃぽっぽ教室やみどり園に行ったが、「うちの子、障害児なの?」、「私の何が悪かったのか」、「育て方が悪かったのか」と受け入れられずしんどかった。
- ・保護者の仲間への相談や情報交換ができ、気持ちを言えることで前を向くことができるようになった。
- ・子ども発達センターや療育など相談に乗ってもらえる環境があり、成長を一緒に喜んでもらえることは保護者が前を向いて進んでいく力になり、とても支えになった。
- ・同じ境遇にいて一緒に悩みを持つ保護者仲間と泣いたり笑ったりできたことで、「私だけじゃない」「無理をしないことが大事」と思えるようになった。
- ・療育に参加するようになると親だけの時間ができてリフレッシュでき、新たな気持ちで頑張ろうという気持ちにもつながった。
- ・受診の動機については、低年齢の子ども（1～2歳）は言葉の遅れに関するものが一番多い。
- ・5歳に近付くと、発音が悪い、外でしゃべらない、多動、かんしゃく、こだわり、切り替えができないといった主訴が出てくる。排せつの問題、不器用、よく転ぶ、偏食・過食・少食、睡眠障害、どこがどうとはないけれども育てにくい、逆に手がかからないといったものもある。姿勢保持、運動、共同注視ができていないかなどの日常生活の力が主な課題になることもある。
- ・低年齢からのサポートは、肯定的に説明して「こうやって関わっていく」ことの大切さを伝え、両親や周りが肯定的に受け止められるようにすることが大切。
- ・家族がもつ子どもを育てる力に着眼することも大切。
- ・1歳7か月児健診に比べて3歳6か月児健診での経過観察は減っているが、健診ではスクリーニングが難しいのかもしれない。KIDS乳幼児発達スケールというツールでは、子どもの自然な行動から発達を見ることができるので、短時間で子どもに負担をかけることなくスクリーニングができると思う。

(2) 人材育成について

- ・支援の核は「人」である。支援する側が一番正しいと思うのではなく、共に子育てを考えていくという姿勢で支援することが大切。
- ・支援者には専門性が必要だが、常識や普通の感覚も必要。親子教室に携わる者は、人を見ながらその人や子どもの状況を考えて声をかけられるように、家庭環境や子

- どもの発達状況など複合的に考えられること、アセスメントをすることが大事。
- ・親は子どもを育てたいと思っているが、一生懸命していても子どもと噛み合わないときもある。うまく育てていけないときに方法論を示したり、保護者の気持ちを明らかにしたり、気持ちに寄り添ったりすることが大切。
 - ・心理職だけでなく、発達や保育、医療など多職種が連携し、多面的に関わることが求められる。
 - ・コロナ禍では研修に行くことが難しいができる限り参加したり経験したりして、ベースの部分の研さんを積んでいくことが大切。
 - ・ZOOMによる個人面接やカウンセラーなどの面接技法の研修など、コロナ禍だからこそその研修形態もあるので、活用すればよい。

(3) 体制について

- ・それぞれの施設や職種、スタッフの強みがあるので、お互いにより形で親子にプラスのことをしていける体制が大切だと思う。
- ・医療で診断を受けるケースについては、診断の時期が遅い印象がある。児童福祉法では診断がなくても療育が受けられるので、奈良市も診断があってもなくても支援を受けられる体制を作っていければよいと思う。
- ・親子支援は、子どもの苦手なところ、得意なところを母親が知って、いいところを育ていくことが大切。マイナスのことを周りから言われ、母親自身がマイナスのことばかり考えてしまいがちになるので、そこを肯定的に支えてあげる支援が必要だと考える。

(4) 今後の親子教室に期待すること

- ・親子教室で、先輩ママの話聞ける機会があるとよいと思う。親は専門家ではないけれども、先輩ママとして経験を伝えることができる。地域の状況を伝えることも後輩の保護者にとって役立つかもしれない。先輩ママとして共感したり、ヒントになりそうな情報を伝えたり、地域の親同士でつながったりすることが大切。経験者の話を聞きたいと思っている人も多いのではないかと思う。